

## スコープ

## 街の変貌

山形県立左沢高等学校教諭 高橋 英司

毎日のように顔を突き合わせていれば気づかないが、人の容貌は日に月に変化している。友人や職場の同僚の顔付きが、病気にでも罹らない限り、ある日突然変わるといふようなことはない。しかし、誰でも経験することだが、十年、二十年の歳月を経た後の同窓会などで旧友に再会すると、昔日の面影は残っているものの、その人相、風体の変貌の大きさに驚くことがある。

同様のことが街の風景や雰囲気についても言える。かつて暮らしたことのある土地を数年後に訪れてみると、その街の様相が一変している。パイパスが走り、郊外型のディスプレイショップやファミリーレストランが建ち並び、新たな市街地が誕生しているのとは大きく、かつて馴染んでいた町中までもが大きく変わっている。駅前を中心に道路の幅が広がり、かつての町並みが消え、風景が一変しているのである。

二十数年前、私は鶴岡市に住んでいた。初めて鶴岡の土を踏んだ時は、城下町の持つ落ち着いた風情に感激したものである。散歩をしていて、道路を右に折れ、さらに右へ、もう一度右

折したら、元の道に戻るはずの予測が外れ、道に迷った経験もあるが、それがまた驚きでもあり、新鮮な発見でもあった。入り組んだ路地が持つ不思議な情緒にも感動することができた。

それが、久方ぶりに鶴岡の市街を訪れてみると、どこことなく肌合いが異なるように感じられる。公園や市役所は同一の場所にあるが、何やら街の景観が異なる。二十年という歳月が、街の印象を大きく変えていた。

こうした変化はどの市町村でも同様だろう。道路を広げ、交通網を整備するのはもちろんのこと、街の風景を一変させる大型デパートやスーパーやコンビニだつて、今では生活になくはならないものとなっている。

産業経済の変化、地域発展の必要から、街の風景は刻々と変貌する。やむを得ないのだ、とは思ふ。それでも、何やら失われていくものへの哀惜の情のごときものが胸中に湧いてきて、やる瀬ない思いに駆られるのである。

また、こじつけのようであるが、少年犯罪の多発やストーカー事件など、最近の殺伐とした世相を耳にするたび、街の風景の変貌とどこかでつながっているようにも考えてしまう。高

層建築と広い道路に代表される外見的な都市化が、景観のみならず、その地域の内部を破壊しつつあるように感じるからである。それぞれの地域が本来備えていた人間的な温かい心を失っていくように思われる。

道路が拡張されることによって、「向こう三軒両隣」の「向こう三軒」がますます遠くなる。かつては子供たちが道路を横断し自由に行き来していたものである。大型デパートやディスプレイショップの進出によって、魚屋、八百屋、乾物屋、酒屋など地元のお店とのコミュニケーションが薄くなった。地域住民が買いたい物がさらに交わす挨拶や世間話も、めっきり少なくなった。

過ぎ去った時代の風景を追慕するこうした感覚は、時代錯誤なのだとは自覚している。懐旧の念にとらわれ過ぎていると非難を受けることもある。しかし、声高に叫び続けなければならぬような心情は消えない。街の変貌は「共同体の崩壊」の象徴に思えてならない。あか抜けて洗練された町並みよりも、気持ちの安らぐ温かい心を、街の風景の中に味わいたいからである。